

現職教員研修の取り組みについて

—東京都長期派遣研修3年間を経過して—

An Approach to Training Incumbent Teachers

研究部

宮城政昭, 遠藤信也, 若宮知佐, 古山良平, 田中満城子, 岩藤英司, 斎藤淳一, 佐藤俊夫, 渡辺聡
(東京都長期派遣研修生) 細川中, 鮎田浩一, 岡部達弥

<要旨>

平成13年から始まった「東京都長期派遣研修」の試行が3年を経過し本校に定着しつつある。しかし、その取り組みは教科ごとに独自に進められているため、研修生のいない教科にとってその内容はわかりにくい。平成15年度から本学附属学校世田谷地区で「現職教員研修カリキュラム開発に関する基礎的な研究」をテーマに、プロジェクト研究に取り組んできたのを契機に、これまでの「東京都長期派遣研修」についての経過をまとめるとともに、今後の取り組みについての指針を示すため研修を終えた3年間の研修生と本校教員にアンケート調査を行い、研修の効果と改善点を検討することになった。アンケート結果をもとに、今後の派遣研修のあり方について提言する。

<キーワード>

現職教員研修, 東京都高校教員長期派遣研修, 特別開発研究プロジェクト, 現職研修カリキュラム, 教科指導, 学校運営

1 はじめに

大学法人化に伴い、大学組織の中での附属学校のあり方について、長期的な展望に立った検討がなされる中、本学附属学校世田谷地区では平成15年度から「現職教員研修カリキュラム開発に関する基礎的な研究」をテーマに、プロジェクト研究¹⁾に取り組んできた。昨年度の研究成果と今年度の現職研修カリキュラム試案については、平成15年度東京学芸大学教育改善推進費における特別開発研究プロジェクト報告書にて報告している。本校では、以前から公開研究大会等を通して、様々な教育課題を各教科の視点から提供し、お集まり頂いた方々と研究討議を重ねてきた。また、4年前から、「東京都長期派遣研修」の試行が行われ、1年間にわたる長期研修が行われている。この「東京都長期派遣研修」については、平成13年の全附属高等学校部会²⁾で報告している。ここでは、附属学校としての今後の展望も踏まえて検討の始まった本校での「現職教員研修」の試みの中で、先行して始まった「東京都長期派遣研修」の3年間の試行の成果と今後の課題について報告する。

2 東京都高校教員長期派遣研修の実情

本校には平成13年からの3年間で、東京都から13名の教員が派遣された。内訳は、1年目：国語, 公民(政経),

数学, 理科(物理), 英語の各1名, 2年目：国語, 地歴(世界史), 数学, 理科(化学), 英語の各1名, 3年目：国語, 数学, 理科(物理)の各1名である。また、今年度も国語, 数学, 英語で各1名の派遣が続いているが、いまだ試行の形が続いている。これは、東京都の財政面での制約も一因と考えられるが、大学および本校内でも本格実施に向けての検討が進んでいないという実情がある。3年を経過したのを機会に、今後どのように発展させてゆくのか、現状の問題点の把握と研修の成果を分析し、派遣側の東京都教育委員会と協議する必要がある。



図1 東京都高校教員長期派遣研修協議会

2-1 東京都高校教員長期派遣研修の概要

東京都教育委員会は、この長期研修の目的を「現職教員に対して研究・研修の機会を与え、学習指導、進路指導などの資質・能力の向上を図るとともに、東京都の教育の充実に資するため、国立大学附属高校に教員を派遣する」として、ホームページに公開している。都立高等学校改革推進計画に関連して、高校ごとの特色化を進める中で、特に東京都の教員の学習指導、進路指導などの資質・能力の向上を目指すための研修と位置付けている。派遣期間は1年間で、研究が終わると翌年は派遣時の所属校とは異なる勤務校に配属されるというのがこの制度の概要である。また本校では、(1)国立大学附属高等学校における長期派遣研修実施要綱、(2)国立大学附属高等学校における長期派遣研修についての協定書、(3)都立高校教員の東京学芸大学附属高等学校における長期研修に関する覚書、(4)国立大学附属高等学校長期派遣研修の手引きの研修の取り決めに則り、研修の場を提供している。

2-2 研修の内容

勤務形態、服務上の取り扱いは、教育公務員特例法第20条第3項に基づく研修出張である。月に1回勤務校の所属長に研修状況について報告する義務がある。基本的には、本校の教員と同じ立場で生徒指導等に当たり、本校の様々な行事にも参加し、学習指導以外の研修も深める。そして、研修生は、研修計画書(4月末日)、中間報告書(10月末日)、研修報告書(3月10日まで)を作成し、東京都教育委員会に提出している。また、研修成果は、本校研究紀要および附属学校研究紀要に掲載されている。

主な研修の内容は、(1)教科指導を実践しながらの教科指導の研修、(2)教科指導に関する研究テーマを定めての教科指導の研修、(3)学校運営の研修など3点である。いずれも、校長、副校長、教科主任等の下に、指導担当教諭と連絡を取りながら、週数時間、直接教科指導の実践を行っている。また、適切な授業評価や教科の授業参観などを通して教科指導に関しての研鑽を深めるとともに、本校が以前から行ってきた先行研究による取り組みである情報の授業にも、本校情報の担当教諭とともに担当教科を問わずTAとして、直接指導にあっている。学校運営に関しては、研究部、進路指導部、教育工学委員会に所属し、本校の校務分掌について研修を深めている。研究部では、公開研究会の開催、附属研究会への参加など、校内での研究体制について、進路指導部では、実力テストの問題作成、採点に加わるとともに、実

力テストの実施状況、進路資料の作成等を研修している。さらに本校教育の特徴でもある各種行事には、授業の支障がない限り参加している。



図2 情報の授業にTAとして参加

2-3 実績や成果

2-3-1 教科指導について

各研修生は一年間の研究テーマを決め、附属高校教員の指導のもと研究を行う。以下に各研修生の研究テーマを列挙してみる。

- ・『伝え合う力を高め、思考力や判断力を養うことを通じて豊かな個性を育成する指導法の研究』
- ・『生徒の実態に合った数学の指導法の研究(学習意欲の高い生徒を、さらに伸ばす数学の指導方法・内容の研究)』
- ・『個性と想像力を伸ばす英語授業』
- ・『意欲的な生徒の能力を更に向上させるための実験授業と用語説明及び評価活動の方法』
- ・『歴史の見方・考え方を育成するための世界史指導法のあり方について』
- ・『公民科「政治・経済」における時事問題の扱い方について(生徒の知的関心を刺激し、学力・思考力を伸ばす授業の研究)』
- ・『生徒自ら問題意識を抱き、自ら調べ確かめる物理実験のあり方について』
- ・『外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う』
- ・『高い学習意欲を持つ生徒の知的関心を刺激し、生徒自らの問題意識を主体的に高め、「生きる力」を育む指導方法・内容の研究』
- ・『新学習指導要領のもとでの中学校社会科歴史分野で

の学習内容をふまえた高等学校地理歴史科「世界史A」「世界史B」における学習のあり方について」

- ・『学習意欲を継続させる授業構成とその評価の研究』
- ・『生徒一人一人が興味・関心を抱き、「数学的な見方や考え方」を育てる授業展開とその評価の研究』
- ・『都立高校に附属高校における物理教育をどのように導入すればよいのか』

研修生はこうした研究テーマに沿って、実際の授業を担当する。具体的な方法は教科によって異なるが、概ね指導教員による授業観察とその授業に関する協議等により研修を重ねる。また、指導教員を初めとして他の教員の授業参観を行い、授業改善に努める。教科によっては定期考査や実力テストの問題作成、評価などに関わることもあり、まさしく現場で実践しながら研鑽を積んでいく。

2-3-2 行事について

附属高校には多くの行事がある。研修生はこれらの行事を通じて、附属高校の伝統である「本物主義」を肌で理解する。

学校全体の行事としては6月の体育祭、9月の辛夷祭（文化祭）、2月の下馬祭（合唱祭）が大きなものである。研修生は行事の当日は勿論、それまでの生徒たちの様子から、どの行事も生徒が主体性をもって企画、運営していることを実感する。

研修生も参加する最大の行事と言えば、夏期休業中の林間学校（1年生）である。4泊5日の日程で、「妙高山」「黒沢池」への本格的な二度の登山、飯盒炊さん、キャンプファイヤー等盛りだくさんの活動が組み込まれている。研修生も生徒たちと一緒に登山にも参加し、生徒が体力の限界に挑む姿やそれを支える教員の体制作りを目の当たりにする。苦しくてもやり遂げることで、達成感を生徒に体験させることの大切さを改めて感じる機会でもある。



図3 林間学校の引率研修

この他に教科行事がある。5月に行われる1年生の地理実習では、ほぼ一日かけて皇居の外郭を歩いて回る。16キロほどの行程であるが、研修生も生徒たちと共に体験し、生徒達がグループで協力しながら活動する姿を見る。また、7月の2年生の古典劇（歌舞伎）鑑賞、10月の1年生の現代劇鑑賞もある。古典劇鑑賞は毎年歌舞伎座で一般の観客と共に鑑賞する。ここにも『本物を体験させる!』という附属高校の伝統が現れている。11月の野外実習、1月の歌留多会、2月のマラソン記録会等への参加など数多くの行事に関わりながら附属高校生の成長していく姿に触れる。

2-3-3 学校運営等の研修について

(1) 校務分掌

① 進路指導部

生徒の主体的な進路決定を促す方法等、生徒の人生目標への方向付けなど、単に受験指導にとどまらない進路指導の在り方を研修する。また実力テストの運営にも携わる。

② 研究部

公開授業研究会の運営、附属学校研究会への参加、全国国立大学法人附属学校連盟高等学校部会研究大会への参加などを中心に幅広い研究体制について体験しながら研修する。

③ 教育工学委員会

教育工学委員会は他の分掌とは異なり、完全な有志の集まりで運営されている委員会である。本校の情報教育を活性化する上で、人数制限された分掌のあり方では立ち行かなくなり、意欲的で有能な人材がいつでも集まれるように考えられたシステムである。その中に身を置きながら、校内のメールシステムの活用やメンテナンスなど様々な分野の可能性を研修する。特に、教科「情報」のTAを通して、生徒の情報の授業の指導に関わりながら、自らの教科の授業における情報機器の活用に至り、その可能性を発展させて研修する機会を得る。

(2) その他

- ① 保健部主催研修（救急救命法、カウンセリングなど）
- ② 学校紹介フォーラムの見学など、附属高校に関わる事柄について研修する。

2-3-4 研究紀要について

研修の成果は、報告書のほかに本校研究紀要³⁾および附属学校研究紀要¹⁾に掲載される。次に紀要に掲載された各研修生の論文のテーマを列挙してみる。

本校研究紀要 39 平成 13 (2001) 年度

- ・「伝え合う力」を高める「国語総合」の指導実践
- コンピュータ・インターネットを導入して -
……鈴木雅之 (国語)
- ・東京学芸大学教育学部附属高等学校での長期派遣研修
の成果と今後の展望 ……松井智徳 (数学)
- ・リスニングコンプリヘンション - 点と線 -
……黒澤一晃 (英語)
- ・必修「情報」授業と学校諸活動におけるコンピュータ
の活用 ……教育工学委員会

東京学芸大学附属学校研究紀要 第 29 集

- ・「政治・経済」授業における時事問題の扱いについて
- 長期派遣研修における授業実践から -
……土方賢作 (公民)
- ・生徒自ら問題意識を抱き、自ら調べ確かめる物理実験
のあり方について
- Investigation 物理を実践してみても -
……山崎松吾 (物理)

本校研究紀要 40 平成 14 (2002) 年度

- ・「書く」ことを重視した国語 (現代文・古文)
- 長期派遣研修における実践 - ……細谷敦仁 (国語)
- ・数学 A における授業実践と生徒の学習状況について
……杉浦忠雄 (数学)
- ・化学実験レポートにデジタル画像を用いることの利点
と課題 ……田中義靖 (化学)
- ・あらゆる教科・特別活動におけるコンピュータネット
ワークの活用 ……教育工学委員会

東京学芸大学附属学校研究紀要 第 30 集

- ・教科書から読み解く帝国主義意識
- 戦前の「國史」教材書の教材化の試み -
……塚原直人 (地歴)
- ・オーラル・コミュニケーションの授業の工夫
……中田敏郎 (英語)
- ・「情報」における観点別評価 ……教育工学委員会

本校研究紀要 41 平成 15 (2003) 年度

- ・「数学的な見方や考え方」を育てる授業展開とその評価
……逸見由紀子 (数学)
- ・生徒の支持する授業形式と学力との相関
……江沼直樹 (物理)
- ・新教育課程と情報教育 ……教育工学委員会

東京学芸大学附属学校研究紀要 第 31 集

- ・物理における Investigation 学習の方法について
……金城啓一 川角 博 田中義洋
派遣研修生 江沼直樹 (物理)

- ・伝え合う力を高めるために
- インプットからアウトプットへ -
……秋吉英理子 (国語)

このように本校での教育実践を踏まえた教育研究の成果が論文の形で残されている。教育工学委員会や物理科のように本校教員と研修生の共同研究の論文もある。このほか、本校での研修の実践は、情報の授業を通して作成した研修生のホームページとして公開されている。

3 研修受け入れ体制についての検討

さて、このように順調に実施されて来た派遣研修であるが、3年が経過してこのままの状態が良いのか、改善すべき点はないのか。研修の成果と今後の研修のあり方を探る目的で、受け入れ側の本校教員とすでに研修を終えた研修生の双方にアンケートをとって検討してみることにした。研修の成果が東京都に戻り、現場で役立っているかは、研修を受け入れている側にとっても関心事である。今年度派遣研修に来ている3名の研修生の協力を得て、本校で研修した研修生が現場にもどり、都立高校に配属された後、研修の成果をどのように生かして活躍しているかのアンケート調査を行った。また、本校の教員に対しては、この派遣研修をさらに充実させて行く上での改善点を中心に意見を聞いた。

3-1 派遣を終えた研修生へのアンケート

現任校での実践と、研修の成果の関連について、教科指導、生徒指導・進路指導、学校運営の観点から、成果を生かしている具体的な実践例と生かしていない理由について回答を求めた。また、研修を振り返って有意義だった点およびやっておけば良かった点について同様に回答を求めた。

3-1-1

現任校での実践と研修の成果の関連について

この回答結果を以下にまとめ、考察を加える。

(1) 教科指導について

(a) 研修の成果を生かしている例

授業内容に関わって

◆政治経済の授業における3分間スピーチ・

研究・発表・討論など。

◆オーラルコミュニケーションCにおけるスピーチ・ディスカッション・ディベートなど。

◆物理における Investigation 物理のやり方での実験。

教材に関わって

- ◆教材作り－学習状況に合わせて、より難易度の高い問題に挑戦できる土台の育成進度等に関わって。
- ◆基本事項と問題演習のバランス。
- ◆「生徒に考えさせる」と「授業の進度を速める」の両立。
- ◆このくらいは生徒に求めてもいいだろうという指針になっている。

評価等に関わって

- ◆生徒の理解度と意識についてのアンケート－綿密な助言・指導。
- ◆生徒の相互評価を取り入れた感想プリント考査に関わって。
- ◆考査での応用問題の設け方。

その他

- ◆情報科との連携。
- (b) 現任校で生かせていない例
- ◆受験指導に偏りすぎ、本質的な内容に多少の欠如を感じる。
- ◆レポート中心の評価。他の教員が反対するため。
- ◆「書かせる」という作業をやらせる時間、評価する時間が取れない。
- ◆文法の説明、小テストなどで手一杯で、深い読解をする時間がない
- ◆情報機器の活用。設備が整っていないためと、WindowsとMacの違いのため。
- ◆教科行事。特に「社会見学実習」。学校全体に教科行事を支援する体制がないため。

考察

すべてのアンケート項目の中で、「研修の成果を生かしている例」として授業の内容に関わる回答が最も多かった。また、授業の内容と密接に関わることで教材、評価、考査についての回答も多かった。これ以外で注目すべきは、進度等のバランス感覚に関わる回答で、この成果は、本研修の特色である「現場で教えながら研修すること」で初めて身に付くものであるといえる。

一方、「実践できていない理由」としては、現任校の体制に関わる指摘が最も多く、これは学校経営にも関わる課題といえる。

(2) 生徒指導（行事、HR など）・進路指導について

- (a) 研修の成果を生かしている例
- ◆行事において、生徒の自主性と教員の関わり方について。
- ◆附高で感じた「集中とキラカエ」「志望をさげる

1. 現任校での実践と、研修の成果の関連についてお聞かせ下さい。

- (1) 教科指導について
 - (a) 研修の成果を生かしている具体的な実践例
 - (b) 現任校で生かせていない例とその理由
- (2) 生徒指導（行事、HR など）進路指導について
 - (a) 研修の成果を生かしている具体的な実践例
 - (b) 現任校で生かせていない例とその理由
- (3) 学校経営について
 - (a) 研修の成果を生かしている具体的な実践例
 - (b) 現任校で生かせていない例とその理由

2. 研修を振り返って、有意義だった点および「やっておけばよかった」点についてお聞かせ下さい。

- (1) 教科指導について
 - (a) 有意義だった研修の内容とその理由
 - (b) やっておけばよかった研修の内容とその理由
- (2) 生徒指導（行事、HR など）進路指導について
 - (a) 有意義だった研修の内容とその理由
 - (b) やっておけばよかった研修の内容とその理由
- (3) 学校経営について
 - (a) 有意義だった研修の内容とその理由
 - (b) やっておけばよかった研修の内容とその理由

表1 派遣研修生に対するアンケート項目

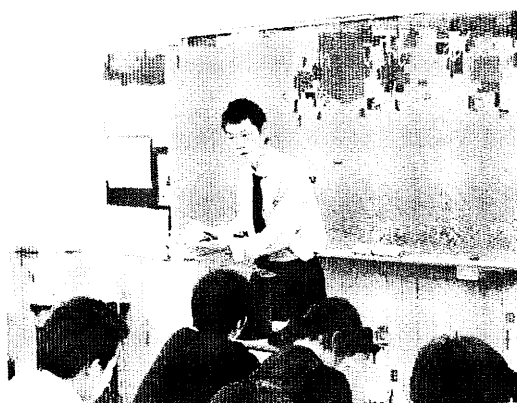


図4 東京都長期派遣研修生の授業研修

な]「すべてをやれ!」など、いま担任として面接、LHRに生かしている。

◆校内模試の問題作成と分析の手法、進路指導資料の作成指針。

(b) 現任校で生かしていない例

◆自分が今、直接生徒指導・進路指導をする立場(分掌・担任)にない。

◆附高の本物主義の行事。進学指導中心で、行事を減らす方向である。

◆都立の方が、過保護であり、生徒の自主性を重んじる姿勢に欠ける。

◆校内実力テストのような自作問題による進路指導

考察

「研修の成果を生かしている例」としては、生徒指導に関する回答が多い。これは、できる限り多くの行事に参加していることの成果といえる。また、進路指導についてはもう少し実際の進路指導に携わる機会が増えると、より成果が期待できる。

一方、「生かしていない例」としては、行事および生徒の自主性に関わる回答が目立つ。いずれも一朝一夕に変わるものではないことがよくわかる。また、実力テスト等進路指導の実践についても、現任校の体制が障害となっているとの回答が多い。

(3) 学校経営について

(a) 研修の成果を生かしている例

◆学校独自のホームページ運営のあり方やその方法。

◆行事の後には必ず行う反省会。

◆教務内規の整備にあたって、附属高校の制度も参考にした

(b) 現任校で生かしていない例

◆自分が今、直接学校経営に携わる立場(分掌等)にない。

◆現任校の現状あるいは経営方針にそぐわない。

◆授業公開の際の意見交換。

◆学校全体としての研究活動。

考察

「生かしている例」として、ホームページの作成以外は、具体的な実践例についての回答は乏しい。これは、直接「学校経営」に関わる立場にない教員が多いためと思われる。「一方、附属高校の『姿勢』にはすぐにでも学ぶところが多い」という回答が多かった。

「生かしていない例」では、現任校および教員本人の現状が理由として挙げられている。これは同時に、将来的には成果を生かしていける潜在的な可能性があることも

示唆するものである。

3-1-2 研修を振り返って

(1) 教科指導について

(a) 有意義だった研修

授業実践

◆一年間を通じて授業実践を行うことができたこと。

(4人)

◆大学教養課程程度の考察へつながる教材など、深い内容を教える教材研究の方法をご指導いただいたこと。(4人)

◆附高の先生方に授業をみていただいたこと。(2人)

授業参観

◆先生方の授業を見学し、具体的な実践方法の示唆をいただいたこと。(8人)

◆質問に答えている生徒以外の生徒の反応を見て、生徒の意識の流れを捉えた

情報のT A

◆指導計画の方法、T Tによる生徒指導と対象理解

◆準備から評価まで、委員会運営のあり方

◆コンピュータの授業への活かし方を学んだ教科行事

◆レポート等の課題の提示、生徒の取り組み方

附属研究会

◆附小、附中の授業を見学したこと。小学校からの流れが少し見えてきた。

◆小中高一貫カリキュラムでは、同じテーマを通して、扱い方の違いから小中高それぞれの対象理解と彼らの学習してきたプロセスを体感できた。

その他

◆附属高校の生徒の発想にふれることができたこと

◆所属校との比較検証(こんな機会はめったにないと思う)

◆定期考査、実力テスト、小テストの結果の分析方法が向上した。

(b) やってあげばよかった研修

◆自校作成問題の作り方。(3人)

◆他科目、他教科の先生の授業をもっと見学してあげば良かった。(3人)

◆3年生の演習の見学・大学入試問題研究。(2人)

考察

「有意義に感じた研修」は授業実践そのものであることがわかる。なかでも、1年間を通じた授業による成果を4人も上げている。さらに、生徒集団内の学力格差が大きい場合の授業形態についての研修や、生徒の学習状

況の変化を調査できたという回答もあった。

また、本校教員と研修生が互いに授業を見学し、意見を交換することが、授業改善に非常に役に立つことが伺われる。これは校内研修をはじめ公開研究授業にも同様のことが言えるのではないか。

深い内容を教えるための教材研究をあげた人も4人いる。授業準備に時間をかけられる環境であることに加えて「附属高校の先生方の深みのある授業に触発された」という回答もあった。このように授業実践という研修が効果をいろいろな形であげている。

一方、「やっておけばよかった研修」として「自校作成問題の作り方」に関する研修があれば良かったとの回答が3人あった。これは近年、都立高校の入学選抜も自校作成問題となっている影響だろう。研修後、配属された学校で問題作成という形でも研修の成果を期待されている様子が伺える。また、授業見学の重要性という面では、「他科目、他教科の先生の授業をもっと見学しておけば良かった」という回答があるように、幅広く研修できる機会を有効に使いたかったというメッセージが伝わってくる。

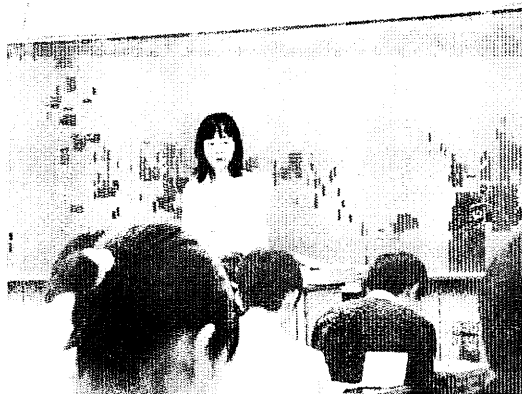


図5 附高生の発想にふれて

(2) 生徒指導（行事、HR など）・進路指導について

(a) 有意義だった研修

学校行事等

- ◆実際の行事にほとんど参加できたこと。(4人)
- ◆古典劇鑑賞教室。「本物に触れさせる」というコンセプトに感心した。(4人)
- ◆妙高登山。「辛くても一步一步しっかり踏みしめれば、目標が達成できる」ことを生徒とともに体感できた。
- ◆地理実習・地学実習等。事前指導や充実した冊子。
- ◆生徒が主体的に取り組む行事などの様子を目の当たりにできたこと

進路指導

- ◆実力テスト、データ処理、進路のしおり、アンケートデータの分析などが実際に役に立っている(2人)
- ◆進路説明会。OB,OGの生の声が聞けた。
- ◆指導方法を研究することで、生徒が主体的にやったり満足でき、しかも良質のものを完成させることができることと確信できたこと。
- ◆拡大学年會に呼んでもらったこと
- (b) やっておけばよかった研修
- ◆部活動を通じた生徒指導-指導法と対象理解ができる。(2人)
- ◆副担任(学年付き)など-日常生活での生徒の様子やその学年指導法(2人)
- ◆担任としての進路に関する面接
- ◆附属高校の学習旅行は事前指導・事後指導とも充実しているの、実際に同行できたらもっとよく理解できたと思う。
- ◆行事等の企画(先生方の話し合い)段階から少しでも関わらせてもらえれば、プロセスが分かり、より身についたと思う。(2人)

考察

「有意義だった研修」として、古典劇鑑賞教室に象徴されるように、多くの研修生が、本校の『本物主義』の素晴らしさをあげている。また、多くの行事を通して生徒を総合的に教育している点に、教育力の高さを感じているようだ。

進路指導に関しても、「実力考査、データ処理、進路のしおり、アンケートデータが実際に役に立っている」と回答があり、この研修の有効性が伝わってくる。

一方、学級経営や行事の運営については、企画の段階から関わりたかったとの回答があった。研修の内容、研修生の立場と役割、分掌の配置などは、今後検討しなければならない課題であろう。

(3) 学校経営について

(a) 有意義だった研修

- ◆I期でしたから、この研修が継続する上で様々な問題点を、副校長を始めとして検討したこと。
- ◆実際に中において感じること。(2人)
- ◆副校長を始めまわりの先生方からいろいろ話をきけたこと。(2人)
- ◆研究大会の運営、ホームページの運営。
- ◆附属学校紹介フォーラム。(生徒による説明・紹介)
- ◆複数の分掌に配属してもらえたこと。学校の全体像が少しでもはっきり見ることができた。

◆公開研究大会の実施や紀要発行などにより、日々の研鑽の発表の機会が設けられ、またそれに応じた先生方の授業や学問に対する厳しい姿勢が感じられたこと。

◆附属学校の研修会に参加させていただいたこと

◆すべてにおいて有意義でした。「全人教育とはなにか」という問いに答えを見つけることができました。

◆国立学校における予算枠の運用形式について。

(b) やってあげばよかった研修

◆学年会等、学年の指導体制と方法。

◆職員会議の一部に参加したかった。(2人)

◆進路指導。

考察

回答から、この研修が多面的に役立っていることが伺われる。これらを踏まえてそれぞれの赴任先の高校にあった教育が実践されることを期待するとともに、研修の内容、研修生の立場と役割、分掌の配置などについては、今後協議しなければならない課題であろう。

3-2 附属高校教員に対するアンケート

以下は、受け入れ側の本校全教員を対象にして行ったアンケート調査の結果である。研修生だけではなく、附属高校の側からも今までの派遣の実態を振り返ることでこの研修制度をより実りのあるものにし、また今後の現職研修の在り方を探ることも目的にして実施した。アンケート項目は、東京都長期派遣研修について改善すべき点について、教科指導、分掌における役割分担、行事について、生活指導についてのなどの観点から回答を求めた。

1. 東京都長期派遣研修について、さらに充実させていく上で改善すべき点があれば、各項目ごとにお答え下さい。

(1) 教科指導について

(2) 分掌における役割分担について

(3) 各行事について

(4) 生活指導について

2. 東京都長期派遣研修について、附属高校から見た発見・効果などがありましたら、お書き下さい。

3. その他、ご意見がございましたら、お願い致します。

表2 本校教員のアンケート項目

3-2-1

東京都長期派遣について改善すべき点

(1) 教科指導について

◆一年かけて見学でき、実際に生徒に教えて、さらに本校の教員の授業研究ができるというシステムは、存在価値がある。(実践的な教材研究+多忙さから若干の解放)

◆研究授業を毎月とは言わないが、年3回程度公開したらどうだろうか。

◆一年を通して同じクラスの指導に当たることに本当に問題はないのだろうか。(評価の問題を含めて。)

◆研修としてお互いに授業を見学し合うことも必要だと思ふ。

◆研修ならば様々な科目、場合によっては他の教科まで幅広く研修すべき。

◆大学の教科教育担当の先生の講義・演習を最低週一回くらい受講できるようにしたい。(いずれ修士課程を一年で取得するコースに入るとき、ここで取った4~8単位が有効であればなお良い。)

◆ただ単に授業をやるだけでなく、テーマを持った研究授業などを多く取り入れて、我々も参加するような形も考えられると思う。

◆本校教員と問題点の共有化をして、共同研究などができるとよいのではないかと。

◆教科指導についての問題意識の違いなどについて意見交換の場があるとよいと思う。

◆研修で何をやってみたいのかもはっきりと表明するのがよいと思う。

◆教科に研修生がいないのでわからない。

◆各教科の事情があるので何とも言えない。

◆持ち時間数負担の軽減に利用している側面はないか。

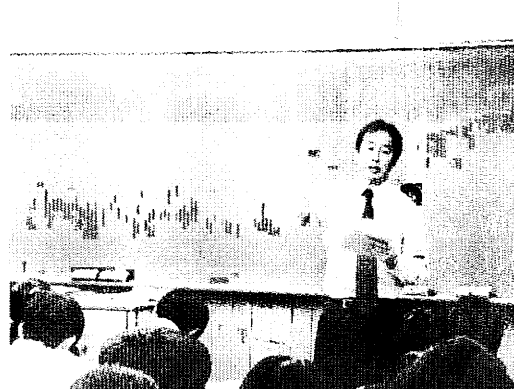


図6 教科指導には熱が入る

考察

この研修制度について、一年間かけてじっくりと実践研究ができるというシステムの有効性を評価している意見があるが、当初から学校全体としての受け入れについての話し合いがないまま実施されてきたため、基本的には教科の裁量で研修形態が固定化されつつある。それに対し、派遣研修生が来ていない教科では、「教科に研修生がいないのでわからない。」といった意見もある。また、「各教科の事情があるので何とも言えない。」という意見がある一方、「一年を通して同じクラスの指導にあたることに本当に問題はないのだろうか。（評価の問題を含めて）」と教科ごとにばらつきのある研修生への対応の仕方について学校としての共通認識を求める声もある。この制度についての共通理解の欠如から、「持ち時間数負担の軽減に利用している側面はないか。」という意見まで出ている点を考えると早急の検討会が必要である。また、「大学の教科教育担当の先生の講義・演習を最低週一回くらい受講できるようにしたい。」「本校教員と問題点の共有化をして、共同研究などができると良いのではないか。」といった肯定的な意見もあるので、校内の共通理解をする検討会と研修生を交えた話し合いの機会が待たれるところである。さらに「研修で何をやってみたいのかもはっきりと表明するのが良いと思う。」といった研修生にさらなる積極的な研修への取り組みを求める声もあるので付記しておきたい。

(2) 分掌における役割分担について

- ◆会議時の視聴覚室の当番などをお願いすることが多く申し訳なく思う。
- ◆本校の普通の教員として関わってもらえるとよい。
- ◆積極的に参加すべき。
- ◆教育工学に関しては、視聴覚室当番で貢献してもらっているが、もう少し主体的に関わってくれてもよいと思う。
- ◆本校の特徴である部分として研究部、進路指導部、教育工学は適切であると思う。
- ◆オブザーバーというか一年だけでなかなか参加しづらい部分も多いようだが、やむを得ないと思う。
- ◆派遣元の都教委が考える内容と受け入れ側の本校の考え方の調整の機会が必要。
- ◆分掌の仕事の中で、どこまでお願いできるかもかなり手探り状態のところがある。
- ◆現在同じ分掌に配属されているが、これも検討する必要があるだろうか。

考察

校内の分掌に関しては現在、「進路指導部」、「研究部」、「教育工学委員会」の三つの分掌に研修生全員が配置されている。本校の特徴を一年間で理解してもらうためには適切であるという意見がある。一方会議中の視聴覚室の当番など本校教員の肩代わりの分担任もみられるが、会議日以外は本校の教員が当番に当たっている点を考えると、適切な役割分担に思える。「分掌の仕事の中で、どこまでお願いできるかもかなり手探り状態のところがある。」「現在同じ分掌に配属されているが、これも検討する必要があるだろうか。」との指摘もあるので、教科指導に関わる意見交換と同様に学校全体で検討してみると良いだろう。

(3) 各行事について

- ◆行事にすべて出ることには大変だろうと思う。
- ◆参加・見学に価値があるのではないか。
- ◆一年しかないところですべて経験するので忙しいと思う。
- ◆本校の普通の教員として関わってもらえるとよい。
- ◆積極的に参加すべき。
- ◆専門の教科、科目によっていくつか絞るのも一つの方法かもしれない。
- ◆全く接点のない学年のものにも参加するので、参加の前にもう少し生徒に対する紹介があった方が精神的に参加しやすいと思う。
- ◆教科行事を始め、多様な行事に参加するのはよいと思う。
- ◆本校の特色を一年間で理解してもらうには行事に参加してもらうのが一番だと思う。
- ◆基本的には本物を経験してもらうという伝統がある。

考察

本校には「基本的には本物を経験してもらうという伝統がある。」というように、教科行事も含め、たくさんの行事がある。授業時間の確保ということがいわれる中、経験でしか身に付かないものを求めて学校行事は続いている。確かに、「行事にすべて出ることには大変だろう。」とは思いますが、「本校の特色を一年間で理解してもらうには行事に参加してもらうのが一番だと思う。」という言葉の通り、本校の教育の理解の最善の方法に思える。

(4) 生活指導について

- ◆責任問題もあり、見学可能な範囲での参加がよいと思う。
- ◆学校間の相違、問題への対処などお互いの良いところを融合させられるとよいと思う。
- ◆部活、学年付きなども経験すべき。

- ◆会議等に出られないこともあって、どうしても限界が生じてしまうような気がする。
- ◆教員の仕事全般の研修を行うのであればどのような場面でも対応してもらうのがよいと思う。いずれにせよ東京都との話し合いが必要。

考察

この研修はやはり教科指導に関する比重が大きいと思う。本校では全人教育という大きな目標の上に教科指導も行っているのだから、学校行事やクラブ活動にも力を注いでいる。本校の教育の理解を目的とするなら「部活、学年付きなども経験すべき。」とする意見が当たっているように思う。しかし、部活指導に伴う交通費や日当、事故が起きた時の責任問題など複雑な問題もあり、「見学可能な範囲での参加がよいと思う。」という意見も生まれてくる。安全性を重視し、部活や学年の仕事の分担はないという現在の体制もやむを得ないが、本物を見てもらおうという視点で数多くの行事に参加してもらっている点を考えると生活指導面での関わりが少ないような気がする。ただ参加するだけでなく企画の段階からの参加の方がより深く研修できるのではないかと考えることもできる。

3-2-2 附属高校から見た発見・効果など

- ◆チーム・ティーチング的な授業研究という方法を採るなど、システム的な研修の在り方（パターン）など一定の方法を自覚的に試みることもあるのではないか。
- ◆都立での話を聞けるので参考になる。
- ◆分掌会議、校内のネットの状況などの効率のよい進め方、技術について意見を聞く機会がさらにあるとよい。
- ◆便利屋のように使っていないだろうか。
- ◆都立高校の現状を知ることできるし、いろいろなアイデアをもらえてよいと思う。
- ◆いろいろな先生の授業を見られるのはうらやましい。
- ◆我々も一年単位で他附属か他校に研修に行ってみたい。
- ◆予算的な裏付けの保証がない。いつまでも「試行」のレベルでやっている研修は、研修の先生、派遣元の在籍高校の負担は大変なもので、予算化されていない研修ならすぐやめるか、都の方で予算化を早急にすべきである。大学側でもいつまでも黙っていないですぐに言うべきである。

- ◆相互に授業研究を行う体制が日常的にできればよいのだがと思わせるものではあったが・・・。
- ◆外から来た人によって刺激を受けている面はあると思う。
- ◆長期といっても一年間は短いので積極的にいろいろなところで取り組むとよいと思う。その積極性が我々にとってもよい効果をもたらすと思う。

考察

「いつまでも『試行』のレベルでやっている研修ならすぐやめるべき」というような極端な意見もあるが、相互交流の効果をあげる意見もある。さらに、「いろいろな先生の授業を見られるのはうらやましい。」「我々も一年単位で他附属か他校に研修に行ってみたい。」といった研修の環境をうらやむ声もある。一年間の期間で都立高校では考えられなかったような数々の行事に参加し、さらに探求心旺盛な生徒たちに授業で接する。毎日は苦勞の連続であるとは思いますが、教員としての様々な能力を最大限に発揮するチャンスでもある。この機会を研修生の皆さんには十分生かしてもらいたいと考える。

3-2-3 その他

- ◆「お客様」的扱いではなく「同僚」(やさしく)として、さらに「研修生」(きびしく)として接していきたい。
- ◆中途半端ではないか。(教科にいないので実感が湧かない)
- ◆もっと積極的に本校の教育活動に関わってほしい。与えられる研修ではなく、自ら何かをつかみ取る研修であるべき。
- ◆授業についてともに学ぶという点では有意義なことだと思う。
- ◆なかなか東京都から予算が下りないそうで、本校の行事に参加してもらうのに負担がかからないよう、試行は早く終えて本格活動にしてあげて欲しい。
- ◆むしろ以上の項目について派遣されている先生方に聞いたらどうだろうか。
- ◆研修の目的自体が明確でないような気がする。そのため受け入れている我々の側もうまく対応できていない部分があるように思える。派遣された先生方もどういう形で本校に関わっていけばよいのか迷う部分もあると思う。大学院と関連づけた研修の形態も考えられると思う。
- ◆研修でどのような点で一番苦勞しているのか知らせて欲しい。

考察

上記のアンケートから、附属高校側としては基本的にこの研修を有意義であるとして考えていることがわかる。しかし、具体的な実施方法等については更なる検討の余地があると考えていることが伺える。この研修制度も開始以来3年が経過し、ある程度問題点等が明らかになっていることから、もう一度教員の間で話し合う必要があると思われる。また、制度上の問題（特に予算の面）について東京都教育委員会と大学側の話し合いが早急に持たれるべきであるとの考えが読みとれる。

4 今後の研修受け入れ体制の方向性

試行の制度といえども、受け入れ側の本校としては、実践の場を持つという長所を最大限に生かして、前記のように多岐にわたる研修の機会を提供してきている。3年の時を経て、実際の勤務校に戻った時、本校での研修がどのように生かされているか。また、派遣されてきた先生方がこの研修をどのように評価しているのか。さらに、本校の先生方や生徒、保護者などの研修に対する理解は得られているかなど、総合的に評価してみる必要性が出てきた。この長期研修は、たとえば大学院における研修とは異なり高等学校という現場で生徒を教育するという活動の中で、研究と実践が一体となったところにこれまでにない新しい研修のあり方を提示している。しかも1年間にわたる長期研修は、おそらく類例がないであろう。そこで、このような「長期派遣研修」が本当に有効なものとなっているのか、冷静に分析してみたい。



図7 東京学芸大学に表敬訪問

4-1 東京都長期派遣研修生による評価

本校での研修を終えた研修生が有意義だった研修として挙げたものに、「授業実践」、「行事への参加」、「附属小、附属中との関わり」がある。高校という現場でより深く

教材を研究し、授業実践という形でそれを具体化できること。本校の本物にこだわる各種行事を通じた教育実践への参加。附属研究会を通しての小学校、中学校の先生方との協議に参加したことなどは、いずれも新鮮であったようだ。さらにTAの形での情報の授業への関わりは、教科の枠を越えコンピュータの授業での生かし方のヒントを与えているものと思われる。そして教科指導の基本である学習状況に合わせた教材作りの実践にその成果を生かしているようだ。また、本校で経験した様々な授業形態を積極的に試みようとする意気込みが感じられる。しかしながら、赴任先の高校における指導の在り方や設備を含めた支援体制の問題などから実現できない事項もあることが伺われる。さらに、部活指導や学年の仕事、行事や自校作成問題の検討など企画の段階からの関与に関心を寄せる声がある。これらを総合し、研修生からのこの研修の評価は良好のようである。

4-2 本校教員による評価

大学からの突然の指示による派遣の開始という経緯からみて、本校教員の全員がこの研修を快く受け入れているわけではない。アンケートの中にも「持ち時間数の軽減に利用している」、「1年間同じクラスの指導に当たることは問題」などの否定的な意見が見られる。「せっかく附属高校に入学したのになぜ都立高校の先生の授業なのか」と堂々という保護者も見られる。しかし、本校はもともと教育実習などを通して教員養成の役を担ってきた。現職教員研修が社会的に重要性を持ってきた現在、本校としてどのような姿勢で、この現職研修に臨むかについて、共通理解が必要である。さらに発展させて「大学の教科教育の講義の受講」、「本校教員との共同研究」などの提案もあり、派遣生の積極的な姿勢を望む声が強いの。そのためにも、個人が持っている研修目的や研究テーマを選抜基準に加えた、オープンな形の研修生の選抜が考えられないかを都教委に検討をお願いしたい。また、研修生が希望する部活動や学年担任などを通しての生徒との関わりについては、場合によっては責任問題も生じてくるので、試行から本格実施に向けての協議の中で環境を整えたい。

5 おわりに

幸いなことに、これまでの研修を行った研修生は、謙虚に誠実に研修し、大きな成果を上げている。経験があるとはいえ、まったく様子も分からない学校で、1年間である程度の成果を求めるのは、本来、酷なのであろう

が、翌年おおむね東京都の進学重点校に赴任していることから、仮に「1年間我慢すれば良い」というような気持ちで臨む研修生が現れるとすれば、この研修の目的は手段と化してしまうことになる。本校が望むのは「互いに高め合うこと」であり、研修生の傍観者的な態度は、むしろ好ましくない。本校の生徒達がそうであるように、積極的に関わっているいろいろなことを試してみることが有効だろう。また、受験技術や進学指導のテクニックのみを得ようとするならば、本校より卓越した研修が受けられる学校が他にあるはずだ。本校での研修は、むしろ附属高校の教育全体を肌で感じ、日本にもこのような学校があることを感じてもらうことだろう。互いに刺激を受けつつ、互いに学びあう姿勢こそが、この研修をより良いものへと発展させて行く原動力となることだろう。東京都教育委員会にも現在の試行の形態の発展的な姿として、本校での長期派遣研修の本格実施に向けての対応をお願いしたい。

また、本校の現職教員研修の取組みとしてはこのような大がかりなものではなく、誰でも簡単に参加できるような研修の機会の提供が重要である。本校がこれまで行ってきた3年に1度開催の公開研究大会は、平成16年からスタイルを変えて毎年実施する方向に変化した。来年度は教科ごとにテーマ、実施時期、方法などを検討する予定になっている。昨年の「現職研修カリキュラム開発に関する基礎的研究」の中で、高校教員の現職研修に対するニーズが非常に高いことが確認された。ことに「授業作りと理論の融合」に対する関心が高いことがわかった。今年度は本校の通常の授業をすべて公開するという試みをしたが、来年度は教科行事などに実際に参加してもらい、その後の協議会などで意見交換するなど、各教科・分掌などの工夫した取組みに期待したい。

参考文献

- 1) 平成15年度東京学芸大学教育改善推進費における特別開発研究プロジェクト報告書
- 2) 平成13年全国国立大学法人附属学校連盟高等学校部会研究大会報告集
- 3) 東京学芸大学附属高等学校研究紀要 vol.39～41
- 4) 東京学芸大学附属学校研究紀要 vol.29～31